

東京大学史料室ニュース

第22号 1999・3・31

目次

アーカイブスの設立を目指して……………	2
沿革史料紹介—「秘書」……………	4
受贈図書一覧……………	6
史料室日誌抄録……………	8



(今回寄託分)



(東京大学百年史掲載)



(史料室所蔵分)

—初代帝国大学総長 渡辺洪基肖像—

アーカイブスの設立を目指して

田 中 学

東京大学史料室が設立されてからすでにかなりの年月がたつ。この間、大学史関係の各種史料の収集、整理、保管などの日常的な仕事はいうまでもなく、近年では史料室が中心となって東京大学の学徒動員・学徒出陣に関する調査・研究が取り纏められたことなど、史料室は着実な成果をあげている。

また、外部からの利用者も多数かつ多方面にわたり、その意味で史料室の存在意義は確かなものになったと、いってよいであろう。

しかし、多面では日が経つにつれて史料室の設立の経緯や当初の意図などを知る人々も少なくなっているように思われる。私はたまたま設立の当時から比較的長いあいだ史料室にかかわりを持ってきたので、退官に際して多少そのあたりの事情を記しておきたいと思う。

史料室の設立に至る前史は東京大学百年史の編纂事業である。この編纂事業がスタートしたのは確か1974年頃であったと記憶しているから、すでに4半世紀前のことになる。百年史は周知のとおり大きくは通史編と部局史編に分かれており、編纂作業も実際には全体を代表する委員会のもとに通史を担当する委員会と、各部局ごとの部局史を担当する部局史編纂委員会が設けられて、それぞれのもとで進められた。

私自身は農学部の部局史を担当した。東京大学の歴史としては戦前に『東京帝国大学五十年史』が編纂されていたが、農学部に関していえば駒場農学校以来の駒場キャンパスから旧制第一高等学校の弥生キャンパス（現在の東大弥生キャンパス）への移転、戦時中の火災、またその火災を避けるための地方疎開などの条件が重なって、古い史料類はおおかた散逸ないし失われていた。

その辺の事情は部局によってかなり異なるであろうが、戦災の影響などでは大同小異ではなかったろうか。いずれにしろ、百年史編纂委員会が通史であれ、部局史であれ史料の収集に大変苦勞したことは間違いない。

そのせいもあつたらうか、百年史編纂事業は当初の予定に反して十数年の歳月を要することになった。しかし、ともあれ東京大学百年史はめでたく完結・刊行されたわけである。

そこで、この編纂事業に携ってきた人々のあいだで、この間に収集された史料をどのように次の世代にバトンタッチしていくか、次の大学史——それが何年先に行なわれるかは別としても——のための史料の継続的な収集・保管体制をどうすればよいか、ということが、編纂にまつわる多くの苦心談とともに話題となった。

そこでひとつの結論が、なにはともあれ今回収集された史料類を散逸・消滅させてはならないということであった。その延長上に大学史史料室という構想が生まれた。

しかし、考えてみれば東京大学は以前とは較べられないほど大規模になり、教育・研究・事務その他、毎日毎日流れる情報量そのものが全体としてみれば膨大なものになっている。そのなかから何を大学にとって重要な歴史の史料として取捨選択・整理保存していくか、そもそも誰がどこでそのような仕事を担当するのか、となると当時該当するものはどこにもなかった。そうしてみると史料室は単なる史料の番人ではなく、大学史の過去から現在、未来にわたる総合的な管理者であるべきではないか。おおよそこのような考えのもとに史料室が誕生したのである。

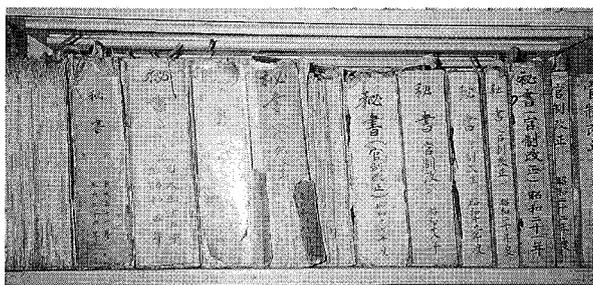
しかもその在り方を考えれば、その役割は単に大学の内部にとどまるものではなく、広く社会に向けて東京大学の歴史と現在および未来の方向を開示すべきものである。それはいかなる存在か？世界各地の主要な大学でそうした役割を果たしているのが——内容はいろいろ異なるが——大学アーカイブスである。東京大学にもぜひそうしたアーカイブスを作ろうということで、その第一段階として位置付けられたのが史料室である。

そうした合意のもとに、委員会では毎年アーカイブスの設立を予算要求の中心に据えてきた。しかし、周知のとおり国の予算政策方針のもとで、残念ながら史料室のアーカイブスへの発展はいまだ実現していない。その道筋としてはいくつかのルートが考えられるが、ともあれ東京大学史史料室が目指してきたものは大学アーカイブスである、という初心を忘れないで、その実現のための努力が継承されることを期待してやまない。

(元史料の保存委員会委員長)

沿革史料紹介 — 『秘書』 —

『秘書』と題された簿冊が、18冊残されている。時期は1892（明治25）年から1948（昭和23）年までであるが、途中1905（明治38）年から1913（大正2）年まで欠本になっている（図表1）。漢和辞典の「秘書」を引くと、①容易に人に見せない大切な書物、②天子の秘蔵する書物。宮中の蔵書、③秘密で重要な文書、④大臣・社長などに直属して機密の文書や用務を取り扱う人、とある。とくに①と③が該当する。大正期以後の簿冊には「官制改正」と括弧書きされている。官制という言葉は現在一般的には用いられず、国家行政組織法及びそれに基づく各府省設置法などが該当する、という。戦前期（旧憲法下）においては、官制の意義及び性質は天皇の下に属する国家機関の設置、廃止、名称、組織及び一般権能に関する定め、とある（『法律学事典』岩波書店）。大学を例にとれば、1893（明治26）年8月に最初の帝国大学官制が制定され、教職員の種類、職掌、定員、待遇などが定められた。『秘書』要するに教職員の人事関係の重要書類綴である。しかし、人事関係というのが多岐にわたっていた。それを指摘するために、つぎに簿冊の目次を見ておこう。



明治年間の簿冊には目次がなく、クロノジカルに編綴されている。目次が付くのは大正3～10年分からになる。目次は官制改正、講座職務俸制定、名誉教授の名称授与上申、学位授与上申、その他重要事項、通牒等の6つから構成された。しかし時代が経る毎に構成は変化して、大正15～昭和5年分は官制改正のみになり、各年別の編綴になる。最初に学位授与上申の項目がなくなる。学位は、1918（大正7）年12月制定の大学令により各大学が授与することになり、上申の手続きが不要になったためである。次に名誉教授授与の項目が消えた。さきの大学令制定にともない帝国大学令が改正され、名誉教授については「勅旨ニヨリ名誉教授ノ名称ヲ与フルコトアルヘシ」と規程された。「勅旨」という形式にも拘らず、1925（大正14）年6月に

名誉教授推薦内規を学内にて制定した。内規によれば、20年以上の在職、功労が著大なる者、学术界に功績顕著な者、のどれか一つに該当する者を投票によって候補者とした。その結果、上申という手続きにそぐわないことになったために綴られなくなったのだろう。

『秘書』に収録されている史料の面白さを具体的な素材から探ってみよう。図表2は1937年に執務上の参考として作られた史料である。考古学講座設置を例にとろう。図表2の左側の官制関係を見ると、書類は予算関係が決定されたのち各学部、各所・台から庶務課、文部省専門学務局、内閣法制局（閣議）、勅令発布という順序にあがっていくのが分かる。「東京大学百年史」（資料三）の考古学講座の設置理由書は、国立公文書館所蔵の『公文類聚』に収録されているものであり、図表の閣議部分の史料に当る。ところでこの講座設置理由書は、ほかの種類もそうであるが、発議段階のそれと異なっている。すなわちこの場合、文学部、大学本部、文部省の三段階を経てさきの「資料三」の理由書になる。

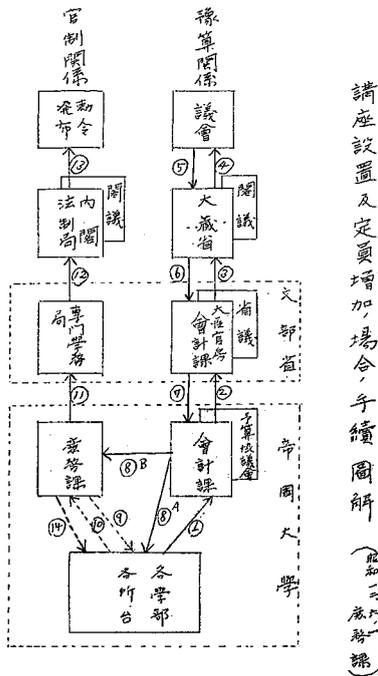
図表1

秘書 付緊要書類	[90]	明治25～29年	(M9)
秘書 付緊要書類	[84]	明治30～32年	(M10)
秘書 付緊要書類	[122]	明治33～35年 (甲)	(M11)
秘書 付緊要書類		明治33～35年 (乙)	(M12)
秘書 付緊要書類	[84]	明治36～37年	(M13)
秘書 (官制改正)	[120]	大正3～10年	
秘書 (官制改正)	[84]	大正11～14年	
秘書 (官制改正)	[26]	大正15～昭和5年	
秘書 (官制改正)	[45]	昭和6～12年	
秘書 (官制改正)	[11]	昭和13～15年	
秘書 (官制改正)	[7]	昭和16年	
秘書 (官制改正)	[12]	昭和17年	
秘書 (官制改正)	[10]	昭和18年	
秘書 (官制改正)	[10]	昭和19年	
秘書 (官制改正)	[11]	昭和20年	
秘書 (官制改正)	[15]	昭和21年	
秘書 (官制改正)	[3]	昭和22年	
秘書 (官制改正)	[8]	昭和23年	

(〔〕は件数、明治33～35年は甲乙合計数、()は請求記号)

「資料三」の設置理由は、「考古学ハ古代ノ遺物ヲ基礎トシテ之ヲ考察シ、古代ニ於ケル社会ノ状態文化ノ事相ヲ究メ以テ歴史上ニ各種ノ考証ヲ与フル学科ニ

図表 2

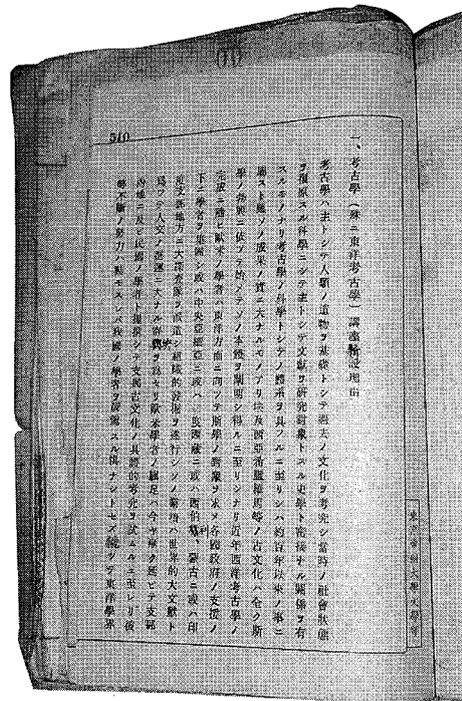


シテ、例ハバ古墳ノ発掘ニヨリテ発見セル遺物ノ微細ノ一部分ニ依リ其ノ時代ト事跡トヲ考察シ当時ノ風俗文化ノ事相ヲ究メ」云々と、学問の意義、発展から入り、「東亜」における欧米諸国学者との確執を説いて、「以テ考古学ノ蘊奥ヲ攻究スルニ便ナラシメ、他面学生ニ之カ基礎知識ヲ授ケ以テ東亜文化開発ニ遺憾無キヲ期セントス」と結んでいる。ところが文学部の講座新設理由書はこれとは違っていた（図表3、『秘書』昭和6～12年）。最初に「考古学（殊ニ東洋考古学）」と限定が付けられ、「考古学ハ主トシテ人類ノ遺物ヲ基礎トシテ過去ノ文化ヲ考究シ、当時ノ社会状態ヲ復原スル科学ニシテ、主トシテ文献ヲ研究対象トスル史学ト密接ナル関係ヲ有スルモノナリ、考古学ノ科学トシテノ体系ヲ具フルニ至リシハ、約百年以来ノ事ニ属スト雖、ソノ成果ノ大ナルモノアリ」と書き出される。ついで「埃及西亜希臘羅馬等ノ古文化ハ全ク斯学ノ勃興ニ依ツテ始メテソノ本体ヲ闡明シ得ルニ至リシナリ、近年西洋考古学ノ完成ニ随ヒ欧米ノ学者ハ東洋方面ニ向ツテ斯学ノ対象ヲ求メ各国政府ノ支援ノ下ニ学者ヲ集団シ或ハ中央亜細亜ニ或ハ印度西藏ニ或ハ西伯林、蒙古ニ或ハ印度支那地方ニ大探査隊ヲ派遣シ、組織的発掘ヲ遂行シ、ソノ業績ハ世界的大文献ト為ツテ人文ノ進運ニ大ナル寄与ヲ為セリ、欧米ノ驥足ハ今ヤ漸ク延ビテ支那内地ニ及ビ、民国ノ学者ト連携シテ支那古文化ノ具体的考究ヲ試ム至レリ、彼等不断ノ努力ハ動モスレバ我国ノ学者ヲ凌駕スル惧ナシトセズ、翻ツテ東洋学界ヲ觀ルニ明治四十年前後ヨリ考古学ノ進歩ノ大ニ見ルベキモノアリ、殊ニ朝鮮ニ於ケル発掘事

業ハ漢楽浪郡時代ノ遺蹟ヲ始トシテ、高句驪、百濟、新羅等ニ亘リ其ノ各ノ古文化ヲ具体的ニ知得シ、延イテハ我国上代文化トノ關係ヲ明確ナラシメ、嘗テハ単ニ文献ノミニ拠ラザル可カラザリシモノモ、千有余年ノ今日ニ於イテ之ヲ面ク視ルヲ碍、而カモ之ニ依ツテ支那古文化モ適確ナル具体的準拠ヲ与ヘラレ欧州学者ノ中亜細亜等ニ於ケル調査ト共ニ民国ノ学者ヲ刺撃、開発シテ支那内地ニ於テモ近時漸ク斯学ノ抬頭ヲ見ルニ至レリ」と、欧米列強の国を挙げての支援による浸食に対して、強い焦燥感を滲ませていた。このあとに閣議請議案（「資料三」）の最後の段落が来る。ところが大学本部の文部省専門学務局への提出書類になると、さきに書いた閣議請議案の最初の部分が、この文学部の書き出しの前に置かれた。そのためもっとも長い文書になっていた。結局、この真ん中の部分、文学部理由書では書き出しの部分が、文部省から閣議に提出される段階において削除されてしまったのである。当時の考古学界にとってもっと切実な課題を訴えた部分が、カットされてしまっていたのかもしれない。

以上が一例である。もちろん、すべての講座設置理由書がこのように全部残っているわけではない。しかし、講座設置理由を含めて、官制関係の制定、改正史料は、これらの『秘書』、国立公文書館所蔵の内閣文書、枢密院関係文書と併せて、はじめて全体像が描くことが可能になる。歴史研究にとって、『秘書』の持つ重要性は極めて高い。〔引用史料には適宜句点を付した〕

図表 3



受贈図書一覧（平成10年6月～平成11年3月）

教養的教育からみた学部教育改革		開講二十周年記念誌	
—広島大学の学部教育に関する基礎的研究（4）—		佐賀医科大学開講二十周年記念事業実行委員会出版	
広島大学教育研究センター	平成10年3月	部会	平成10年5月
学術体制刷新委員会関係資料目録		三田評論 '98. 8. 9	
広島大学教育研究センター	平成10年3月	慶應義塾	平成10年8月
大学論集 第27集 1997年度		富士論叢 第43巻 第1号	
広島大学教育研究センター	平成10年3月	富士短期大学学術研究会	平成10年5月
大学論集 第28集 1998年度		下田歌子関係資料総目録	
広島大学教育研究センター	平成10年5月	実践女子大学図書館	昭和55年3月
人文論集 第33巻 第2号		実践女子学園七十年史	
神戸商科大学経済研究所	平成10年2月	実践女子学園	昭和44年10月
学術月報 第51巻 第6号		女子の修養	
日本学術振興会	平成10年6月	学校法人実践女子学園	昭和53年11月
忘れえぬ日 長崎医科大学被爆50周年記念誌		実践女子学園八十年史	
長崎大学医学部原爆復興50周年医学同窓記念事業会		実践女子学園	昭和56年5月
	平成7年8月	学術月報 第51巻 第8号	
長崎医科大学原爆被災復興日誌		日本学術振興会	平成10年8月
長崎大学医学部原爆復興50周年医学同窓記念事業会		全国教育委員会一覧—平成10年版	
	平成7年8月	文教協会	平成10年8月
長崎原子爆弾の医学的影響		学術月報 第51巻 第3巻	
長崎大学医学部附属原爆被災学術資料センター		日本学術振興会	平成10年3月
	平成7年12月	東大99 研究する東京大学	
天下御免—高橋喜平、延清、克彦、太田祖電ら一族—		（財）東京大学新聞社編集部	平成10年7月
福来保夫	平成10年3月	文書館紀要 第11号	
三田評論 '98. 7		埼玉県立文書館	平成10年3月
慶應義塾	平成10年7月	小林（茂）家文書目録	
立教学院百二十五年史 資料編第2巻		埼玉県立文書館	平成10年3月
立教学院百二十五年史編纂委員会	平成10年3月	カラーマイクロフィルム撮影地図目録I	
近世・近代 沼津の画人たち		埼玉県立文書館	平成10年3月
沼津市明治史料館	平成10年7月	要覧第16号	
司馬遼太郎の風景4 NHKスペシャル「長州路・肥薩の道／本郷界限」		埼玉県立文書館	平成10年3月
NHK「街道をゆく」プロジェクト	平成10年7月	早稲田大学史紀要 第30巻	
学士会会報 第820号		早稲田大学大学史資料センター	平成10年7月
社団法人学士会	平成10年7月	横浜開港資料館紀要 第16号	
井上円了センター年報		横浜開港資料館	平成10年3月
東洋大学井上円了記念学術センター	平成10年7月	学院史料 1998. 8 VOL.16	
サティア〈あるがまま〉第31号		神戸女学院史料室	平成10年8月
東洋大学井上円了記念学術センター	平成10年7月	比較文化論叢 2	
図表でみる江戸・東京の世界		札幌大学文化学部	平成10年7月
東京都江戸東京博物館	平成10年3月	神戸大学広報委員会速報 NO.1～56	
御雇外国人教師ウエスト資料集		神戸大学広報委員会	昭和44年
滝沢正順	平成10年3月	寧楽史苑 第12号～第43号	
		奈良女子大学史学会 昭和38年2月～平成10年2月	
		向陵 第40巻 第2号	
		一高同窓会	平成10年10月

受贈図書一覧（平成10年6月～平成11年3月）

学士会会報 第821号		大学に「明日」はあるか	
社団法人学士会	平成10年10月	毎日新聞社	平成10年11月
次田大三郎日記		日本学術振興会事業の概要 平成10年度	
関西高等学校校史資料室	平成3年7月	日本学術振興会	平成10年
サティア〈あるがまま〉第32号		兵庫教育大学二十年史	
東洋大学井上円了記念学術センター	平成10年10月	兵庫教育大学	平成10年10月
加藤彰廉先生		書にみる沼津の人物	
星野 通	昭和12年3月	沼津市明治史料館	平成10年12月
中島徳蔵先生		仰岳Ⅱ 大分医科大学二十周年記念	
中島徳蔵先生学徳顕彰会	昭和37年5月	大分医科大学	平成10年10月
東大ウオッチング		創立70周年記念誌 神奈川大学70年のあゆみ	
花山 獏	昭和63年12月	神奈川大学	平成10年11月
旧制高等学校の青春—旧制高等学校記念館資料集—		百華 第38巻	
松本市教育委員会	平成10年10月	財団法人新日本奨学会	平成10年12月
大学改革と大学評価		学術月報 第51巻 第12号	
財団法人大学基準協会	平成7年6月	日本学術振興会	平成10年12月
転換期の大学院教育		サティア〈あるがまま〉第33号	
財団法人大学基準協会	平成8年7月	東洋大学井上円了記念学術センター	平成11年1月
大学論—大学「改革」から「大学」改革へ—		318海軍設営隊戦記—比島クラーク戦線—	
財団法人大学基準協会	平成8年7月	岡沢 裕	昭和57年5月
大学改革を探る—大学改革に関する全国調査の結果から—		渋沢研究 第11号	
財団法人大学基準協会	平成8年12月	渋沢史料館	平成10年10月
大学の質を問う		学術月報 第52巻 第1号	
財団法人大学基準協会	平成9年7月	日本学術振興会	平成11年1月
検証・陸軍学徒兵の資料		わたしたちにもできるこれからのボランティア1	
陸軍学徒兵の史料編纂委員会	平成11年1月	ボランティアってなんだろう 基礎編	
資料にみる大学基準協会五十年の歩み		KEN (有)KEN編集工房	平成11年3月
財団法人大学基準協会	平成9年7月	—太平洋戦時下の教育—師範学校	
福澤一太郎蔵書目録		柳井 久雄	平成11年1月
慶應義塾福澤研究センター	平成10年10月	久保正幡略年譜・主要著作目録	
京都大学百年史 総説編		久保 正幡	平成10年7月
京都大学百年史編集委員会	平成10年6月	図録東京電機大学90年 1907-1997	
∞無限大—ハーン、百年後の解釈—		学校法人東京電機大学	平成11年1月
日本アイ・ビー・エム(株)	平成3年	第四高等学校関係資料リスト	
学術月報 第51巻 第10号		金沢大学50年史編纂室	平成11年2月
日本学術振興会	平成10年10月	山口大学50周年記念誌〈通史〉	
霞会館資料展示委員会要覧		山口大学50年史編集委員会	平成11年3月
霞会館資料展示委員会	平成10年10月	山口大学50周年記念誌〈写真集〉〈対談〉	
三田評論 '98. 11		山口大学50年史編集委員会	平成11年3月
慶應義塾	平成10年11月	新島研究 第90号	
上越教育大学創立20周年記念誌「飛躍」		同志社社史資料室	平成11年2月
上越教育大学	平成10年10月	沼津市明治史料館史料目録23 下香森田家・高田家文書目録	
産業医科大学開学20周年記念資料集		沼津市明治史料館	平成11年3月
学校法人産業医科大学	平成10年9月		

史料室日誌抄録（平成10年11月～平成11年2月）

- | | |
|--|---|
| 11. 18（水）中野室員、新任職員研修にて講義。 | 2. 18（木）中野室員、教育学部五十年史編纂会議に出席。 |
| 11. 30（月）東京大学史史料室ニュース第21号発行 | |
| 12. 9（水）中野室員、国立大学協会五十周年記念行事準備委員会に、専門委員として出席。
（ほか '99.2/9） | この間の閲覧者数
学内者 9名
学外者 8名 |
| 12. 10（木）中野室員、「日本の高等教育を考える」講演。 | |
| 12. 11（金）「メリーランド大学所蔵ブランゲ文庫展」（於：早稲田大学）見学 | 主な学外閲覧者所属機関
筑波大学、早稲田大学、明治大学、桜美林大学、テレコムスタッフ |
| 12. 15（水）第47回東京大学史料の保存委員会開催。 | |
| 平成11年 | 文献撮影・複写許可件数 6件
調査（照会）件数 18件 |
| 1. 20（水）NHK教育TV ETV特集で、史料室所蔵史料が使用される。 | |
| 2. 12（金）文京ふるさと歴史館にて開催の「なつかしの修学旅行展」見学。（史料室より貸出した史料あり。） | |

表紙の説明

表紙の肖像画について

99年3月、アイソトープ総合センターの森岡正名氏から表紙の肖像画を寄贈していただいた。初代帝国大学総長渡辺洪基は草創期の大学の舵取りを行った。再評価の機運も伝えられる。肖像画は洪基の一人娘にあたる渡辺貞子氏が保存されていた。貞子氏は明治34年4月2日東京生まれ、東京女子高等師範学校附属高等女学校卒、平成8年7月16日逝去。貞子氏は日本画の画家、振興美術院会員として活躍され、画集に「玉花源氏物語画集」がある。「東京大学百年史」に掲載した肖像画などに比べ、優しく描かれている。

題字 森 巨元総長

東京大学史史料室ニュース 第22号

発行日：1999年3月31日（年2回発行）

編集・発行：東京大学史史料室

東京都文京区本郷7-3-1

電話 03(5841)2077 内線22077, 82036

印刷所：株式会社 芳文社

Archives Section of the University of Tokyo

東京都町田市忠生1-18-18